

海外探訪記

ロシア沿海地方との農業協力訪問団先遣隊に参加して

事務局長 高橋 善輝

6月初めのウラジオストクの朝は、まだ肌寒く上着なしでは歩けない。時差は新潟より西方にあるにもかかわらず、日本標準時より2時間進んでいる。暗くなるのは10時半頃で、遅い夕食をすませても街はまだ明るい。市内では9割方が日本車で、郊外へ出るとロシア製の古いトラックを見かけるくらいだ。急激に車が増えた所為なのか駐車場はほとんど見当たらず、当たり前のように道路の両側に駐まっている(写真1)。

かつて、新潟ではバイパスなどの幹線道路を歩いたり、自転車に乗ったりするロシア人を数多く見かけたものであるが、今はまったくと言っていいほど見ない。2009年にロシア政府が自動車産業の保護を目的に輸入車の関税を大幅に引き上げたことから中古車の輸出がストップした。それだけの理由ではないだろうが、日露間の交流は窄まり、新潟-ウラジオストク間の定期航空路も乗客の伸び悩みから運休に追い込まれた。日本からのウラジオストク行きの定期便は成田空港からの週2便が唯一である。

ウラジオストクはソビエト連邦時代には極東の海軍基地として重要視され、1991年のソ連崩壊まで、一般には立ち入れない閉鎖都市であった。現在はロシア極東最大級の都市(人口62万人)であり、沿海州地方の政治・経済・文化の中心となっている。昨年9月にルースキー島で開催されたロシアAPECを契機に、島を結ぶ斜張橋の建設や空港と直結する鉄道「アエロエクスプレス」の開通など大量の資本が投下されている。農業分野においても、沿海州政府は農業生産を2倍に高めたいと鼻息は荒く、日本の先進技術によるオーガニックな農産物の生産や畜産などに技術協力を求めている。

市街地から80km程の海に近いロマノフカ村、レチツァ村に点在する15年間使われていない元軍用農用地約1万ha、同じく100km程内陸部に入ったウスリースク村の個人農場を視察した(写真2)。写真3のように15年間も使用されなかったには樹木もそう多くはなく、生産は可能と思えた。個人農場の畑では大豆が播種され、馬鈴薯が芽を伸ばしていた(写真4)。炒めたベーコンを混ぜたジャガイモはホクホクで、新潟の男爵イモと遜色なく美味しい。この個人農場では、17人のロシア人従業員と50人の中国人労働者により1500haを経営しているが、経営者は高齢で規模縮小を望んでいる。



(写真1)



(写真2)



(写真3)



(写真4)

その農地を日本人から経営してもらいたい意向であるのだが、果たして経営が成り立つのかどうかである。仮に、日本であれば17人のロシア人の中から後継者が現れると考えられるが、雇用制度に由来するものか、経営的に受け手がいないのか疑問が残る。農産物の流通ルートや市場価格、農地の耕作権など、農業経営を見据えた本格調査に期待をしたい。

新潟市は日本海側唯一の政令都市であり、港は日本海側拠点港の指定を受けているものの、新幹線が開通間近の金沢市や豪華客船が泊まる伏木港の活気に押され気味である。

日露農業協力を糸口にして、エネルギー部門や都市インフラ整備、医療、観光などの他分野でも官民総力をあげて対岸交流の拡大を図ることが出来れば、新潟からの定期便復活も見えて来そうである。

中国黒龍江省における灌漑技術改善協力事業について

業務課長 清野 績

中国黒龍江省における灌漑技術改善協力事業調査団員(灌漑技術改善協力事業実行委員会)として、7月24日から28日までの日程で調査に参加しました。黒龍江省では、灌漑効率の向上が課題となっていることから、米どころ新潟の進んだ灌漑技術を現地に合わせた形で導入・普及させることを目的として、黒龍江省の富錦市、慶安県、そしてハルビン市の現地を調査し、意見交換などの技術交流をしてきました。

黒龍江省の面積は約45万km²であり、日本の国土面積約38万km²に対して広大な面積を有しています。高速道路に乗り、行っても行ってもトウモロコシ畑や水田が続く広大な土地と景色に驚きました。

黒龍江省における水稲栽培は、10年ほど前から主に始まったそうです。水田面積は365万haで、灌漑用水については、河川などの地表水35%、井戸を利用した地下水65%をそれぞれ利用しています。地下水は、地盤沈下及び水質の問題はありませんが、低温障害による品質低下・減収などの問題が発生します。黒龍江省には松花江などの大河があるので、もっと河川からの地表水を効率よく導入できるよう、施設の維持管理を含め調査・検討した方がよいと思いました。

黒龍江省水利庁の節水灌漑技術センターや試験圃場など、先進的な研究機関を視察して、研究内容や規模は進んでいると感じました。また、河川水を水源とする揚水機場やパイプ灌漑施設を導入した模範的大区画圃場についても、その圃場施設は遅れているとは思いませんでした。河川水を利用したパ



模範的大区画ほ場(富錦市)



河川を水源とする用水(慶安県)

イブ灌漑は、低温障害もなく、効率よく配水できるので、節水効果は十分あると思います。しかし、それは一部の地域であり、用排水路・農道の未整備地がまだまだ多く、これからの整備が待たれると思いました。

今後の日中合作事業の進め方について、協力事業実行委員会と黒龍江省水利学会で協議・検討し、短い時間の中、難しい問題もありましたが、双方のまとめようとする努力があつて、農業水利に関する日中技術交流合意書を結んできました。これからもこの事業に少しでも手伝えることがあれば、積極的に協力していきたいと思っています。



技術交流合意書協議による会議(ハルビン市)

亀田郷環境整備連絡会・亀田郷地域用水対策協議会総会

7月19日、各工区、自治会・コミュニティ協議会、行政機関で組織されている亀田郷環境整備連絡会・亀田郷地域用水対策協議会総会を開催しました。

平成24年度の活動報告、平成25年度の活動計画について承認されました。また、平成22年度に申請した環境用水の水利権許可(舞潟揚水機場から取水)が期限を迎えたので、3年間の事業効果について、水質保全、景観保全、生態系保全などの報告と平成25年度からの環境用水導入について取水量や通水ルート追加の変更をして、引き続き、水利権取得の申請を行う報告をしました。



五十嵐会長より開会あいさつ



小笠原先生の基調講演

総会後には、宇都宮大学雑草科学研究センター教授小笠原勝氏より「雑草の生態と制御」と題して基調講演をいただきました。雑草の生態をまず知ることが重要であり、その雑草の管理方法として河川、道路などそれぞれの場所で適したものがあり、それを実践していくことが大切であるとわかりやすく示していただきました。